

筆者は昨年11月16日に市民文化会館で開かれた「希望学・釜石調査報告」シンポジウムに出席するため、2年ぶりに夕暮れ時の釜石駅に降り立った。山々は既に紅葉を始めていた。車窓からの沿線の風景も実にのどかで心和むものであり、季節感の違いを感じさせた。筆者の釜石訪問はこれで3度目である。06年9月と同年11月に東京大学社会科学研究所の助手として訪れて以来となる。釜石調査のメンバーの中では、訪問回数が多い方とはいえないと思う。そういう意味では、釜石のことについて人前で語ることにいささかのちゅうちょを覚えて、2年ぶりの釜石の空気を

深呼吸したわけである。駅から宿泊先に向かう道すがら、同僚と歩きながら感じた第一印象は、「釜石、踏ん張っているな」である。駅には新しい待合室ができ、商店街には2年前の記憶にはない新しい装いの店舗もある。明らかにシャッターを降ろしたまま、というお店が増えた印象はない。道路にも清潔感があり、行き交う車の数も以前に増して多いように思える。

筆者にとつて、政治家を対象とするアンケート調査は初めてのことであり、設計、実施、分析といずれも骨が折れる作業であった。特に、お忙しい議員諸氏から調査票を回収するのは大変であり、何度も督促状を送る羽目になった。また、インタビュー調査についても、書き起こされた原稿を元に、何度も対象者に本人に校正をしていただき、人によって

希望学プロジェクト特別寄稿

しなやかに、 そしてしたたかに

第10回 上神貴佳さん



Profile うえかみ・たかよし
1973年生まれ。高知大学人文学部准教授。専攻は政治学・現代日本政治分析。著書『地方政治家の肖像—2006年岩手県釜石市議会議員インタビュー記録』など。

は1年以上をかけて、やりとりを行った。辛抱強くお付き合いいただいた方々に、この場を借りてお礼申し上げます。

さて、その調査の結果について簡単にご紹介したいと思う。結論から述べると、市議会議員には問題意識と解決策の一定の範囲における共有が見られた。仙人峠道路、公共埠頭、湾口防波堤など社会資本整備によって企業を誘致し、産業を振興する。産業振興によって雇用を確保し、人口減少にも歯止めをかける。雇用確保の手段としては、観光や漁業の振興を挙げる意見もあったが、観光客を呼び込むためにも、漁獲物を輸送するためにも、社会資本の整備が求められる。まとめると、このようなご意見が多かった。

もちろん、反対意見も存在する。例えば、

開発ではなく社会福祉を手厚くすることにより雇用を確保すべきとの意見があった。また「統合」されたかつての市民病院についても、市当局の方針に反発する声があった。大町、大渡町、只越町の中心市街地を活性化するための政策についても、議員の間では熱意に違いがあった。意見の違いがあるのは当然であり、多数派の独走をチェックするためにも、むしろ健全なことである。

とはいえ、釜石市における多様な意見を反映する議会において、将来展望について、ある程度の合意の存在を見いだすことができたのは1つの成果であった。問題は多数意見が「将来展望」たり得ているかということである。特に公共事業との関係が問題となる。かくいう筆者は昨年4月より高知大学に転勤となっ



た。高知においても、経済活性化は大問題である。県民所得は全国で下から2番目、有効求人倍率は0・5倍を下回り、公共事業依存度は四国の中で突出して高い。来る総選挙に向けた候補者による公開討論会においても、国から公共事業を獲得することの重要性が主張され、それなりの支持を得ているようであった。公共事業によるインフラの整備が重要であり、必要であるとしても、そのインフラを用いて、どのような経済活性化策を打ち出していくかを問わなければならないはずである。しかしながら、手段であるはずの社会資本整備が目的化しているような印象は否めず、確たる将来展望が示されないことに暗然たる気持ちになったことをここに告白する。人は1人では生きていけないが、自らの所業を全て他人の責任とすることもできない。従って、他力本願と自力救済の危ういバランスのどこかに道を見つけないといけない。しかしながら、それは難しい営為であり、人も社会もいずれかに流されがちである。流されないためには、周囲と折り合いを付けながらも自らの進路を常に考えていく、自己と他者の、理性と感情の粘り強い対話が必要である。

2年ぶりに釜石を訪れて、必要とあれば国や県という「他人」の力を利用しつつ、しなやかに、そしてしたたかに自らの生きる道を探して行って欲しいと願う自分がある。釜石にはその展望と実践がある。そう思えることに「希望」を感じるのである。